

キャリア意識からみた大学生の授業へのまなざし

吉岡 一志

山口県立大学 教育研究推進室

University students' attitude toward classes from the point of view of career consciousness

Kazushi YOSHIOKA

Yamaguchi Prefectural University Office for the Promotion of Research and Education

Abstract

The purpose of this thesis is to examine the relationship between career consciousness and university students' attitude toward classes by interviewing those who clearly have career consciousness. This research showed that university students spent their campus life based on something that they want to do. They focused on acquiring skills associated with their desired job, they tried to learn it by committing to several communities. As a result, they evaluated classes only on the criteria of whether it helped for their future work or not. If they judged that the class is not useful for their job, they discarded the class without hesitation even if it was necessary for the curriculum. For them, classes are just meaningless routine. But they recognized the class as a rare opportunity for them to take an active part in discussions.

Key words: university students, classes, discussions, career consciousness, job

1. はじめに

本稿の目的は、学生へのインタビュー調査を通して大学生のキャリア意識と授業に対する態度との関係を検討することである。

現在、大学への進学率はユニバーサル段階を迎え、大学は多様な学生への対応を求められるようになってきた。このことに加え、大学生の就職内定率は2010年11月時点で調査以来過去最低に達し（2010年11月13日 朝日新聞）、大学生、あるいは大学そのものを取り巻く状況は、一層厳しいものになっている。こうした状況においてキャンパスライフといった大学生の実態が注目されるようになり、大学生の学習状況や就職支援等に関する調査、研究が盛んにおこなわれるようになってきた。

現代の大学生像を描き出した溝上（2004b）によれば、現代の大学生はやりたいことや将来の目標から自身の生き方を模索するインサイド・アウトの生き方ダイナミックスを持つという。しかしながらインサイド・アウトの生き方ダイナミックスは、いくつかの問題点を内包する。インサイド・アウトの生き方は趣味や娯楽から出発する場合が多く、目標に

向けたりアリティのある活動に発展しにくい。あるいは、希望する職業に就いたとしてもやりたいことと職務内容との間にミスマッチを起してしまうなどがあげられる。

このような大学生の生き方の原因を、本田（2009）は「キャリア教育」に求めている。本田（2009）は高校段階の「キャリア教育」は高い割合で浸透しており、やりたいことや将来の目標を自身で決めていくことが期待されているという。ところが、現行の「キャリア教育」には自身の将来を自身で決定していく手段や方法の提示が欠けているため、進路選択をめぐって若者に不安や混乱をきたしていると指摘している。

以上の先行研究では、現在の若者の進路選択をめぐってやりたいことを見つけていくことが強調されており、そのことが大学生たちの進路選択に少なからぬ影響を及ぼしていることを指摘している。しかしながら、これらの研究は高校生や大学生の進路選択や就職後というアウトプットに関する課題に焦点をあてたものであり、キャリア意識と学生生活の関連については十分検討がなされていない。キャリア

意識は進路選択に限らず、大学生の日常的な生活のなかでもある種の行動規範になっていることが考えられる。そこで、大学生のキャリア意識が学生生活に及ぼす影響を見ていく必要がある。

武内(2003, 2005)や溝上(2004b)によれば、近年の大学生たちは学生生活の中でも学業を重視するようになってきているという報告がある。武内(2003)はこのような大学生の授業に対する姿勢を景気の低迷によるものと考察しているが、これまでのキャリア教育の肯定的な側面があらわれているものとも考えられる。教員養成課程の学生の希望進路と授業での学習の動機づけとの関連を分析した伊田(2003)は、希望進路と学習内容の関連が学習への動機づけを構成すると述べる。同研究は、学生たちの将来のビジョンが特定の授業へのコミットメントをもたらすものと見ることができよう。

しかしながら、伊田(2003)は、動機づけという側面ではしか検討していない点で不十分である。高い動機があっても熱心に授業に臨んでいるとは言えない。また、同研究は、生徒指導の一科目のみでしか検討していない。学生たちは大学の4年間で多様な内容や形態の授業を受ける。当然、興味のある授業もそうでないものも履修しなければならず、多様な授業がある中で学生たちは自身の進路と関係づけ、様々に意味づけしながら授業に臨んでいると考えられる。

このことは、京都大学高等教育研究開発推進センターと電通育英会が実施した「大学生のキャリア意識調査2007」の中でも指摘されていることである¹⁾。同調査は、参加型授業などの授業の形式や、大学生の生活に視野を広げ授業外での学習などにも配慮し、これらに対するキャリア意識の関連を検討している。ただし、ここでも、授業の参加率、学習時間など定量的な調査に留まっており、学生の授業態度や勉強の内容など、ミクロな視点での学生の生の姿勢が十分に議論されていない。

そこで本研究では、キャリア意識の高い、すなわち、やりたいことを明確に持つ学生へのインタビュー調査をもとに、彼らの授業に対するまなざしを探ることで、キャリア意識と授業態度の関連を検討していこう。

2. 調査の概要

2010年6月から7月にかけて、山口県立大学の全学科のすべての学年を対象に44名の学生に1時間半から長くて3時間程度のグループインタビューを実施した。本調査は、授業改善に関する調査として実施されたものであるが²⁾、学生にとっての授業は溝上(2004a 2004b)が指摘するようにシステム化した学生生活の一部に過ぎない。そのため授業以外のアル

バイトやサークル活動、同大学を受験した経緯など学生生活のダイナミックスを聞きだしている。その中で学業とキャリア意識との関連も語られている。

本稿で取り上げる学生は、一グループの福祉系学部の男子学生と看護系学部の女子学生の上級学年の2名である。インフォーマントの2人は、しっかりとした将来の目的、やりたいことを持って入学してきており、他のインフォーマントに多く見られた、やりたいことを持つ学生の典型的なパターンを示していた。ただし、女子学生については、同じやりたいことを持った学生の中でも他の学生とは異なり著しく活動的である。この女子学生は極端な事例ではあるが、やりたいことを重視する学生の特徴がより明確に浮かび上がると考えられる。

また、グループインタビューを用いることで、両者がそれぞれの生き方や思いに触れ、自身のそれを内省しながら語るができる。というのも、学生たちの授業を受講した感想は授業直後にすべて完結するわけではない。授業後に友人や先輩、教員たちと語り合う中で時間をかけて何度も再構築していく。グループインタビューはこうした流動する授業に対する語りを全体的に捉えることができる。

なお、インフォーマントが特定されることを防ぐため、授業名や個人名を指示語に置き換えるなど、語りの内容や雰囲気損なわれない程度に一部修正を加えている。また、現在の学年や所属等も分析に支障のない範囲で伏せている。

また、トランスクリプションの表記方法については、桜井(2001)に従って行なった。

3. 学生のキャリア意識の形成と課外活動

ここではまず二人の学生がどのような進路をいかなる過程で決定してきたかを見てみよう。その上で、インフォーマントの二人が、現在の大学生生活を送っているのかを課外活動に焦点を当てて明らかにしていく。授業が大学生活というシステムの一部なのであれば、学生たちの生活全体を俯瞰することが不可欠である。

(1) キャリア意識の形成過程

J君は高校3年生の時に、自身の祖父が大病を患い、母親が祖父の住む他県へ毎週のように通い献身的な介護をしているところを目の当たりにした。J君は「高3ですごいほぼ大人にまあ近くて、何かやらんといけんという気持ちはあった」ものの何もできず、祖父の最期を前に相当な「無力感」を感じたようである。この無力感は「普通科の勉強とか、何も数学とか国語とか役に立たない」と、J君に普通教育への懐疑をもたらした。

この転機はJ君自身の進路選択に大きな影響を与

える。同時期はちょうど高校の教員からも「そろそろ決めんといけんだろ」と進路を定めるよう促されており、J君は「自分は何したいんやろう」とやりたいことについて考えていた。そして、祖父の一件に際し、残された祖母に同様の思いをさせたくないという思いを念頭に置き、社会福祉士という「困った人とかを助ける、支援を必要とする人を助ける仕事」を目指して現在の大学を選択したのである。

一方Rさんは、J君ほどの劇的な進路決定の物語はない。彼女は、J君の進路決定の物語を聞いたあと「家族がとかじゃないんですけど」と前置きをして、「テレビで見た助産師の活動とか、国際支援協力とかの活動を見て、そういう世界のことにすごい興味があるので、そういう世界の人とかかわれるというのを専門的に助産とか、お母さんとか子育てっていう形でかかわりたいなと思って」と答えている。

彼女の特徴は、進路選択の動機が家族や身近な人々との間で形成されたのではなく、テレビというメディアにそのきっかけが求められている点³⁾、また、「助産師」と「国際支援」と言う一見結びつかない二つの職業イメージが同時に語られている点である。Rさんの現在の所属やその他の語りから、親子関係や家族を「テーマ」として掲げ、世界中の様々な環境におかれる家族の関心に関心があることが推測できる。Rさんが語る「助産師」と「国際支援」は以上のような関係にあり、その両者を学べる現在の大学を選択したのである。

以上の二人のインフォーマントは、いずれも高校時代にはすでにやりたいことを明確に持ち、それに適した大学を選んで入学してきた。J君は迫られる進路決定を家族との物語の中から見出し、Rさんはメディアで語られた職業をモデルとし、それぞれにやりたいことから職業選択という道筋を歩んできている。二人はいずれも本田（2009）など多くの論者が指摘するような自己実現を強要される現代社会において、着実に自身の将来を見据え進路を選択していた。いわば、二人はキャリア教育という観点から見れば、やりたいことを見出した優等生であると言える。

しかしながら、両者を比較した場合、J君の方が進路選択の経緯がより具体的な体験に基づいていることや自身の関心と職業のビジョンが明確に結びついていることから比較的堅実に見える。そこで、両者の課外での生活をさらに詳細に見ることで、二人の違いを明確にしていこう。次では卒業後の進路とかかわる日常の取組に焦点をあてる。

（2）キャリア意識に基づく課外学習

調査者の「勉強してる？家で」という質問に対し、Rさんは「はい」と臆することなく答えた。彼女は

「私の新聞が勉強道具です」と言う。「世界情勢」に関心を寄せる彼女は、自身の知的な好奇心を新聞というツールを通して満たしているのである。一方で、助産師になるための国家試験の勉強を熱心に行っていたかと言えば「したことないですね」と語る。

J君については、現在は必要に迫られて試験の勉強をするようになったとのことであるが、あくまで「国家試験のためみたいな」と自身の成長とは結び付けて考えていない。祖父の最期で感じた普通教育に対する「役に立たない」という意識がJ君には深く根付いているため、試験で扱う知識にも抵抗を感じるのかもしれない。

このように、両者とも、いわゆる試験勉強には注力していないということがわかる。とはいえ、二人が持つ将来像が口先だけの空虚なものであるとは言えない。両者ともサークルやボランティア活動など、自身の関心に適ったコミュニティに所属し、そこで様々な活動を行なっているのである。例えばRさんの場合は、自身の関心に合致する海外を視野に入れた看護系サークルを立ち上げている。また、地域のNPOや研究会などのコミュニティを探し出しては参加をしているという。そうした活動の一つとして実際に海外へも足を運んでいる。

これらの話しを聞いたJ君は「すげ、何で？」「マジで？」と、Rさんの行動力に驚きを隠せない様子であった。Rさんのこのような積極性は、同大学の学生の中では異例なものと言ってよい。J君の驚きは、自身の活動の程度と比べRさんがあまりにかけ離れていたからに他ならない。しかし、J君も社会福祉に関連するボランティア活動など複数のコミュニティに所属しており、また「結構ふだんから先生の研究室にズバズバ入って」行くような積極性も持ち合わせ、意欲的に活動している。

以上のように、J君とRさんはともに試験勉強等の学業にかかわることについては、ほとんど関心を払わないものの、自身の将来設計を支える興味、関心に沿った課外活動には積極的に参加している。このような自身のやりたいことに忠実な学生の姿勢は、溝上（2004b）が指摘する「インサイド・アウト」の生き方を典型的に示していると言えよう。両者はボランティアやサークル活動など大学生活の中で、自身の興味や関心に従いふさわしいコミュニティを活用しながら経験値を積んでいるのである。

ただし、J君とRさんでは、職業と自身の興味、関心の質は関連は同等のものではない。J君が祖父の死という具体的な体験において人の役に立ちたいという思いを社会福祉士という職業に託している一方で、Rさんはあくまでやりたいことを追求しており、職業はそれに付随するものと考えている。と言うのも、調査者が青年海外協力隊への関心を問うと、

Rさんは「何かそういう団体とか、余り興味がないです。何か縛られる感じで、自分で見たいことがあるから」と述べる。Rさんは自由を奪う組織に参加することを拒み、やりたいことを徹底的に追求する。

このことからみれば、Rさんが語る「助産師」は就労を志向するものではなく、助産師という生き方を志向していただのではないかと考えられる。国家資格の勉強をせずサークル活動に専念したのは、就職することよりもやりたいことの追求を重視しているからではないだろうか。以上のようなRさんの態度は、明確なキャリア意識がフリーターへの参入を促すという本田（2005）の指摘を想起させる。

4. 大学の授業へのまなざし

このように、キャリア意識と密接に関連づけられた自身の興味や関心に忠実な学生たちは、大学の授業をどのように見て、いかに参加しているのだろうか。前章までの議論からすれば、職業に関連する授業には熱心に参加し、そうでない授業に関しては関心を示さないというように選択的に授業参加していると考えられる。結論を先取りすれば、職業との関連を誰が見出すのかという点が二人のインフォーマントの授業へのまなざしを読み解くカギとなっている。

(1) 軽視される授業

これまでのインフォーマントの語りを見る限り、将来のビジョンを持ち、いわゆる試験勉強にこそ熱心ではないものの、サークル活動等に積極的に参加し非常に意欲的な学生たちであった。しかし、大学の授業の重要性について質問したところRさんは「振り返ったら、私はほとんど寝てます」と答えている。いくつかの授業のタイプについて聞いてみても「私が寝てるからわかんない」と相当数の授業にまともに参加していない様子がわかる。

J君はというと、授業は単に資格に必要な単位を要領よく取っていくというスタイルである。これまで受けたすべての授業についてもう一度受講したい授業はあるかという質問に対して、ないのだという。とくに教養科目にいたっては自身が就職して働くために「必要なのか」とカリキュラム自体にも疑問をいだくほどである。

なぜそれほど授業に関心、魅力がないのか。このことは、二人が大学の授業そのものに限界を感じ、自身の成長にとって不要なものとして認識していることによるものと考えられる。

R：実習前に、レジュメとか教科書を振り返って自分でやる。結局、何か教科書とかレジュメをしゃべっ

てるばかりだから、寝る、寝ます。

J：確かに教科書とか読んだらわかるけど、わからなかったら聞きに行くしみたいな部分はおれはある、確かに。

上の引用からわかるように、授業内容は教科書の範疇を出ないと認識が二人にはある。もちろん、これは授業を展開する教員の力量が大きな原因となることは間違いない。とはいえ、必ずしも学生たちは教員を非難しているわけではない。J君は「普通に研究室とかに行き、先生にこれこう思うんですけど、どうですかねって聞きに行く」というように、教員の持つ知識には一定の評価をしていることがわかる。つまり、授業がつまらないのは教員にすべての責任があるのではなく、「授業」という時間、空間にそもそも限界があるという認識があると考えられる。

先述のように、J君にとって授業は資格を取るための単位という位置づけにすぎない。国家試験対策も「一人で教科書読んでやるほうがいい」と、授業に期待をしていない。Rさんについては、印象に残った授業の感想として、ある教員に対し「すごいマニアックで、あそこまでなんかちっちゃいものに興味がある、フフフ、すごいと思って。何でそんな頭なんだとか、おもしろい」と、教員の人間性を大いに評価していた。その反面、この授業の内容についてはほとんど何も語ることはなかった。おもしろいことにRさんが言及した教員の授業は、多くの学生からあまりよい評価を得ておらず、Rさんがいかに授業内容に関心を向けていないかがうかがえる。すなわち、二人にとって授業は単位を取るための形骸化した儀式という程度のものでしかない。二人は授業評価にまったくまじめに取り組んでいなかったのだが、これは単位取得の儀式に過ぎない授業に改善の必要性を感じなかったためではないだろうか。

(2) 解釈される授業－職業の関連

しかしながら、二人の学生をひきつける授業も存在する。上述の授業に対するインフォーマントの語りを受けて、授業の必要性について調査者が質問したところ、Rさんは「演習とか、実習に出るまでの技術とかを学ぶときは//J:わかる、わかる、わかる、わかる//こういう考え方もあるよとか、こういう患者さんの気持ちに//J:わかる//立ってみたらっていう、そういうアドバイスとか、考え方をいっぱい与えてくれて//J:それはわかる//そういうのは先生が言ってくれて納得して」と、実践的なノウハウを身につけるといって授業は重要であると指摘する。

J君にとっての魅力的な授業もまた職業上のノウ

ハウに直結する演習や実習などの授業であるという。次の引用は、やりたいことと授業との関係についてのJ君の語りである。

S：なるほどね。だから、やっぱり実習というか、演習の外に出ていくやつというのは、すごく、何ていうんだろう、まさに自分がやろうとしたことというところに直結してんのかな？

J：やっぱり人とかかわるってということで、具体的にそういう利用者の人にどういう言葉がけをしたらいいか、どういう態度でかかわればいいか、そういうところは僕の人とかかわれるかっていうのが自分の中の課題なんで、実際にやっぱかかわってみると、自分ができないこととか自分ができるが発見できるので、そういうことがすごい実践的で、すごいいいと思いました。

この語りからわかるように、教養教育など職業との関連が見いだせない授業に対する態度と比べ、職業に関連する実践的なノウハウが学べる演習形式の授業には大きな関心を寄せる。J君は実習や演習形式の授業を通し、社会福祉士になるための技術や態度を積極的に磨こうとしているのである。

さらにRさんの語りからは、自身の解釈によって多様な領域にも関心を拡張させていく可能性を見出すことができる。「音楽とかとりたかったけど、何かやっぱり看護とかは音楽療法があるから」と答えたのは、履修したかった授業を聞いた時のことである⁴⁾。Rさんにとって多くの授業が寝て過ごす程度のものであったにもかかわらず、音楽という教養科目に、大学も意図していなかった、つまり資格取得のための単位とは無関係の科目に職業との関連を積極的に見出していたのである。このように学生たちは独自の価値観によって授業を解釈し、自身の興味との整合性を図りながら意味づけているのである。

ただし、履修したかった授業と実際に履修して興味を抱いた授業は異なるため、以下の語りにも留意する必要がある。特定の授業について題目やシラバスから解釈された関連が実際に履修してみても意にそぐわないものであればいとも簡単に切り捨ててしまうのである。

R：あ、でも、そうやって外に出てみて、もう一回あれ、あのことを学びたいかと思って、今になってとりたいた授業とかはあります。でも、そう考えたときに、その授業で本当に自分のなりたいたいことがあるのかとか、ちょっと、違ったら何か途中でやめようかなとか思ったり、でもやっぱり自分の活動が軸にあるかなと思う。

(3)「生き方」を磨くディスカッション

以上のように、課外での学習同様、授業への関心はキャリア意識に支えられており、個々の学生の価値観によって授業内容と職業との関連を解釈し、意味づけていた。一方で職業のノウハウに直結した内容の授業だけでなく、その形式にも二人の関心は向けられていた。それは、ディスカッションが取り入れられた授業への関心である。ディスカッション形式の授業が学生にとって魅力的であることは、これまでの先行研究でも指摘されている(水間 2004)。このディスカッションという形式にも学生たちのキャリア意識と深い関連があることは容易に予想できる。

Rさんは内容については明確に答えることができなかったが、充実したディスカッションを行なうことができた授業を印象が残ったものとして挙げた。その授業を受けてRさんは「看護以外にもすごい目を向けるところっていっぱいあると思って、その授業ですごい広がりました」と語った。J君についてもディスカッションが好きかをたずねると「僕、めっちゃ好きです」という。J君にとってディスカッションは「自分の意見を言える場と、相手の話を聞けるということ」であった。この発言を受けて相手の話を聞けることは「重要です。相手の本音っていう感じですよ」とRさんもその重要性を指摘する。

二人は授業においてディスカッションで「相手の本音」を聞き、語り合うことを欲しているのである。なぜなら授業以外で「相手の本音」を聞ける場面が少ないからである。このことはJ君の「なんか普段は友だちとかとくだらん話とかしかほとんどしないから」、あるいはRさんの「本当なんかあの看護師さん怖いとかもう実習嫌とかばっかり言ってるから、もっとそんなこと話したいんじゃないのになーとか思うときがあります」という語りからもわかる。このように、彼らの「本音」で語り合う欲求は日常の友人たちとのつきあいの中では解消されず、授業がその貴重な場を担っているのである⁵⁾。

学生たちにとって「本音」で語り合うことがいかに不可欠であるかは、その不在が大学生活の不満につながっていることからわかる。J君は「全く4年間で勉強する気なかったなとか、何か考えてないな」と思える学生が周りに多く、他の大学と比べて「そういう面ですごい熱さがない」ために、現在の大学生活を「何か微妙」と位置づけている。J君はこの不満を「自分と同じくらい熱さを持つてるやつが集まっ」ているサークルに所属することで解消しているのである。RさんはJ君のように大学生活に対する不満を口にしてはいるわけではないが、それはJ君と同様サークル活動等である程度その渴望を満たしているからだと考えられよう。このことを踏ま

えれば、学生にとって授業におけるディスカッションがいかにか重要な機会になっているかがわかる。

では、インフォーマントの二人は「本音」で語り合うことにどのような意味を見出しているのだろうか。それは「君の言葉を借りれば「実際のかかわりのこととかを考えさせられる」つまり「実際に将来どういう、感じの、まあ社会福祉士として、どういうことをやっていけるか」を語り合いの中で模索することができることにある。Rさんも同様に「何か学生同士が、その、将来、看護師としても、将来としても、自分が子どもを生むって、生むってなったとき、すごい切実な問題じゃないですか。それを真剣に話したりとか、自分の子どもに障害があったらどうするとか、自分もし産めない体だったらどう考えるかっていうのを真剣にディスカッションで話せた」と語る。すなわち、二人はディスカッションの中で常に将来を見据え、職業人としての振る舞いを含めた自身の「生き方」を洗練しようとしているのである。

以上のように、二人にとって授業は、単位取得のための儀式であると同時に、将来の「生き方」について本音で語りあう機会を提供できる数少ない場として位置づけられていたのである。

5. おわりに

以上、キャリア意識という観点から、大学生の授業に対するまなざしを検討してきた。本調査では、先行研究で指摘されているとおり、やりたいことを基準として将来の職業を見据えて生活している姿が見てとれた。彼らは、非常に熱心に自身の目指す職業における技術の習得を求め、様々なコミュニティに属しながら学生生活を送っている。そのため職業に活かせる知識や経験を養えるかどうかは授業の評価基準になり、その結果、必要性を感じない授業はカリキュラム上の必要性とは無関係にいと簡単に切り捨ててしまっていた。彼らは儀式としての授業に限界性を見出し、期待を抱くこともない。ただし、彼らにとって大学の授業は、真剣に議論することができる数少ない場として位置づけられていた。

これらの結果を受けて、先行研究と照らし合わせると、近年の学業を重視する学生たちのもう一方の一面が見えてくる。学生たちは授業には要領よく参加してはいるものの、その内実は必ずしも勤勉な姿勢で臨んでいるわけではない。確かに、将来就きたい職業という目標がありそれに向けて自身のやるべきことが分かっている学生たちは、授業に対しても真摯に臨んでいることは間違いないだろう。しかし、目標に向けてやるべきことは、自分の価値観や視野に強く規定されており、柔軟な発想を持ちにくい。本調査における職業に関連がない授業を軽視してし

まう学生たちの姿はこのことを示している。

本調査におけるインフォーマントはキャリア意識が強く形成されており、この意味ではキャリア教育の成功例と見ることができる。しかしながら、これまで明らかにしてきたように、キャリア意識は非常に積極的に、将来に向けて日々の生活を堅実に過ごす学生たちの姿勢を形成しているが、一方で学生たちの興味や関心の幅を限定し、融通の利かないものになっている可能性が指摘できる。

同様のことは溝上(2004b)でも指摘されているが、学生たちの限定された関心は教養教育に限らない。それは専門科目も含め授業全般に及ぶ。すなわち、大学教育においては、教養教育だけでなく、専門教育さえも学生から見れば存在意義が揺らいでいると言えよう。「大学は一部でしかないみたいな、言ってしまったら全体の、夢の一部というか、ハハ」と冗談交じりに語るJ君のこの発言は、大学という小さな世界に収まりきらない広大なビジョンを表現したものとより、大学を部分的に利用するという程度のことを意味する。このように強固なキャリア意識は学生たちにとっての授業や大学の価値を矮小化させる危険性をはらんでいるのではないだろうか⁶⁾。

ところが、大学の授業は学生同士の「本音」を引き出すことができる特別な空間でもある。それは学生たちの普段の生活とは一線を画した非日常的空間とも言える。儀式としての授業はディスカッションを通して活性化され、学生たちが多様な価値観に触れて視野を広げる機会ともなっていることが二人の語りから明らかになった。このことを踏まえれば、矮小化した授業や大学の価値を解放する契機もまた授業の中にあるのかもしれない。

本調査の結果は、近年のキャリア教育の展開と学生の授業態度の因果関係を明らかにしたのではなく、キャリア意識の高い学生の授業に対する意味づけの過程を検討したに過ぎない。今回の知見をもとに、授業の多様な形態や内容とキャリア意識の関連を、量的な調査をもとに分析していく必要がある。

参考文献

- 土井隆義, 2008『友だち地獄-「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房。
- 本田由紀, 2005『若者と仕事-「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会。
- 本田由紀, 2009『教育の職業的意義-若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房。
- 伊田勝憲, 2003「教員養成課程学生における自律的な学習動機づけ像の検討-自我同一性、達成動機、職業レディネスと課題価値評定との関連から」『教育心理学研究』51(4), pp367-377。
- 溝上慎一, 2004a「大学新入生の学業生活への参入

- 過程－学業意欲と授業意欲』『京都大学高等教育研究』高等教育研究開発推進センター。
- 溝上慎一, 2004b『現代大学生論－ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』日本放送出版協会。
- 水間玲子, 2007「学生は授業に何を求めているか－授業への参加動機から」溝上慎一『学生の学びを支援する大学教育』東信堂。
- 桜井厚, 2001『インタビューの社会学－ライフヒストリーの聞き方』せりか書房。
- 武内清, 2003『キャンパスライフの今』玉川大学出版。
- 武内清, 2005『大学生とキャンパスライフ』上智大学出版。

注

- 1) 京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会, 2008『大学生のキャリア意識調査2007調査報告書』http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/files/research/report/chosa_report2007.pdf
- 2) 本研究は、山口県立大学において教育研究推進室が実施した授業改善に関する調査の結果に基づいている。
- 3) 小学生時代の広島への修学旅行で体験した「原爆」の学習活動が世界に関心を向けるきっかけとなったと語るように、単純にテレビで見たというだけが動機形成の契機というわけではない。
- 4) Rさんの所属する学科では、4年間を通し必修科目が多いことで、自由に履修できる科目が限られている。
- 5) ここで引用した「相手の本音」とは、字義通りの相手の本心ということではなく、「くだらん話」とは対照的な、まじめで真剣な態度で議論する話を意味している。土井(2008)は、近年の若者のたちの人間関係を、他者との衝突を極端に避けるために自己主張をせず、高度で繊細な気配りをする「優しい関係」と捉えている。インフォーマントの二人が、大学の友人たちと「くだらん話」ばかりになってしまうのは、土井(2008)が説明するところによるものと考えられる。学生たちが「優しい関係」を打ち破り、互いの主張ができるのは、授業という場が持つ特殊性によるものなのかもしれない。
- 6) 今回分析を行なった二人のインフォーマントは、キャリア意識の高い学生たちの典型であるとしたが、必ずしもやりたいことを明確に持つすべての学生を代表するわけではない。外国語系学部では、本稿の二人が大学の授業を単位取得の儀式程度のものとして位置付けていることは

対照的に、語学スキルを身につけるために授業に大きな期待を抱いている学生も少なくないことを指摘しておく必要がある。ただし、やはり語学系の学生もスキルの獲得に無関係な授業を過小評価する傾向にあった。

